

日本ブロンテ協会関西支部
2019年大会プログラム

場所：近畿大学東大阪キャンパス38号館2F 多目的利用室
(〒577-8502 東大阪市小若江3-4-1
近鉄大阪線「長瀬駅」下車 徒歩約10分、または
近鉄奈良線「八戸ノ里駅」下車 徒歩約20分)

日時：2019年3月20日(水)13:30~19:00

司会：山内 理恵(神戸市看護大学准教授)

開会挨拶：(13:30~13:40)

開会の辞：服部 慶子(日本ブロンテ協会関西支部支部長・大阪大谷大学教授)

会長挨拶：橋本 清一(青山学院大学名誉教授)

会場校挨拶：山口 仁宏(近畿大学理工学部長)

研究発表：(13:40~14:40)

死者を思う —— *Wuthering Heights* における遺品と死者の痕跡

越後谷 明恵(日本女子大学大学院博士後期課程)

シャーロット・ブロンテの初期作品におけるフィニッシュ

—— 『ジェイン・エア』におけるジェイン、およびバーサと比較して ——

片山 美穂(大阪成蹊大学准教授)

講演：(15:00~16:00)

「自己と他者のあいだ —— アン・ブロンテの文学」

清水 伊津代(元近畿大学教授)

談話会：(16:10~16:40)

総会：(16:40~16:50)

閉会の辞：内田 能嗣(日本ブロンテ協会顧問・帝塚山学院大学名誉教授)

懇親会：(17:00~19:00)

場所：アカデミックシアター4号館3階「THE LOUNGE」

会費：5,000円

日本ブロンテ協会関西支部事務局

〒530-0055 大阪市北区野崎町1-25 新大和ビル3F 大阪教育図書株式会社内

TEL: 06-6361-5936(代) bronte.kansai@gmail.com

研究発表要旨

1. 死者を思う ―― *Wuthering Heights* における遺品と死者の痕跡

越後谷 明恵 (日本女子大学大学院博士後期課程)

エミリー・ブロンテ(Emily Brontë, 1818-48)の『嵐が丘』(*Wuthering Heights*, 1847)の中には亡霊キャサリンとともに彼女の遺品がいくつか登場する。デボラ・ラッツ(Deborah Lutz)はヴィクトリア朝時代、生者は死者のイメージと生活を共にしていたと指摘している。ヒースクリフがキャサリンの存在を感じようと、彼女の痕跡を集めた嵐が丘屋敷の中で“I am surrounded with her image!”と叫ぶ場面は、ラッツの指摘する文化的背景を象徴しているといえる。しかしながら、ヒースクリフは自身の行為に虚しさを抱くようになる。ヒースクリフのこの姿をヴィクトリア朝の背景と重ねたとき、作者エミリーはそこに死者と生者の関係の限界を示しているのではないか。亡霊(死者)キャサリンと残されたヒースクリフの関係を、キャサリンの遺品と墓の場面を中心に探ることで、死者を残すことの限界として描かれる『嵐が丘』の世界観を再考する。

2. シャーロット・ブロンテの初期作品におけるフィニック

―― 『ジェイン・エア』におけるジェイン、およびバーサと比較して ――

片山 美穂 (大阪成蹊大学准教授)

シャーロット・ブロンテ(Charlotte Brontë, 1816-55)は「アングリアとの別れ」(“Farewell to Angria”, 1839)で、彼女の初期作品の世界に別れを告げた。それにもかかわらず、Diane Long Hoevelerが指摘するように、シャーロットの成年期の作品には、初期作品におけるゴシック的要素が見受けられる等、初期作品との繋がりが示唆されている。本論では、シャーロットの初期作品である「開かれざる巻の一葉」(“A Leaf from an Unopened Volume”, 1834)等に登場するフィニックという、ザモーナ公爵の息子に着目をする。彼は最後には彼自身の父親であるザモーナに抗い、暗殺をしようとするのであるが、このフィニックに関する語りと、『ジェイン・エア』(*Jane Eyre*, 1847)におけるジェイン・エアやバーサ・メイソンの描写等を、比較する。それによって、フィニックに関する初期作品の語りや、激しい感情を内包する物語という点で、成年期の作品へと繋がっていると示すことを試みる。